

お話し伺訪問メモ 2001

震災から7年目に入った2001年は新世紀とも称されて、被災地の中心地である神戸市では「21世紀復興記念事業」なるものが60億円の事業規模により「復興のお披露目」を行なっています。

週末ボランティアの被災者宅へのお話し伺訪問は、2001年4月からは第2、第4の土曜日に行なわれることとなりました。復興を記念せず復興をお披露目もせず、被災者の中に復興の現実を見つめにいくその訪問の中から、心の目を紡いで、覚えを残してみたいと思います。

プライバシー保護のため、内容には一部修正を入れていますことをご了解ください。
※3月以前の報告につきましては、「7年目の声」をご覧ください。

4月14日、4月28日

・60代男性、一人暮らし。中央区で被災。避難所が空くまで1週間、学校のコンクリートの上で寝泊りした。近くの高校で空きができた、と呼んでくれて初めて暖房のついている部屋へ入った。次第に昼や囲いがついてきた。仮設に入るのに3ヶ月かかった。東京の大学生が言ってくれて申込書をポストに入れたら、名谷の仮設が当たった。罹災証明の発行のため公園で延々と並んで、もらうのに3日間かかった。途中で整理券を出すことになり列を離れることができた。職員も応援の者が多く、対応の行き違いから叩きのめされた職員もあった。仮設ではモーニング喫茶を開いたりしてお世話をしていたが、脳梗塞で倒れ、失明した。巡回で血圧を測りに来てくれた県の方が、血圧が高いと言ってくれなかった。仮設から公営住宅に移るには当たりはずれがあり、仮設の友達で騙される様にして入った先で不便している人がいる。現在、週2回のヘルパーを受け、1級障害で病院への通院介助を受けている。病院は3ヶ月で出されるので困っている、など屋外で春の日差しを浴びながら、6年間を様々に語っていただいた。（鹿島、東條）

・震災で奥様を亡くされて、ご自身も半身麻痺。しかし会社や地元の自治会や防犯協会で重要な役割を果たされている60代の男性の方や、毎週カルチャーセンターへ通っておられる80代女性の方や、いずれもとても前向きに生きておられる方からお話しを伺い励まされる。（籠嶋、鎌田）

・70代女性。兵庫区の雨漏りのする半壊の家で住んでいたが西神の仮設に3年間お世話になり、2年前にこちらにやってきた。一人なので寂しい時があるが週1回の集会所での昼食会や趣味の刺繍などに通い踊りを見に行くこともあると言う。ここで趣味が刺繍と言うことで訪問者と話しが弾んだ。（小波本、佐竹）

・80代女性。須磨区で全壊。西神第1仮設ではよくしてもらった。現在緑内障で字が読めず、あまり外に出たくない。人に接するのが面倒、人の世話になるのが苦痛で付き合いは難しい。全体的に引っ込み思案の方でしたが、部屋に上げていただき、いろいろとお話しをしてくださいました。（矢野、藤田）

・60代男性。長田で被災。自宅は全壊。現在は健康面で問題が多く、週2回遠くの病院へ通っている。咳が止まらず腰痛でお風呂洗いもできず、視力が低下し眼科にかかっている。他に内科と整形外科にかかっている。以前頭を打ってから読み書きが難しくなり、カレンダーも自分

で作ったものを使っている。仮設の時と違って近所付き合いがとても少ない。仮設では気の合う友達がいたが今はほとんどいない。月8万円の収入で、病院への交通費や光熱費お風呂代などを支払うと生活はとても苦しい。(籠嶋、相馬)

・80代女性。兵庫区で被災、自宅は全壊。以前から心臓が悪い。この復興住宅に来てから病氣勝ちで月2回病院へ通っている。自治会の喫茶や手芸などに以前は参加していたが、病氣になってからは参加していない。住居については不便さは感じていないが、身体はしんどい。(籠嶋、相馬)

・60代ご夫妻。長田区で被災。新長田で被災されたお話を伺う。ベットの下にすべりこんで「九死に一生」を得た。同じ階で二人の男性が死亡されたお話を聞く。ベランダでお花を作り、玄関をきれいに飾ってしてご夫妻で元気に住んでおられるが、「ここは希望して住んだ場所でないのがつらい」と語られた。(西谷、相馬)

・60代男性、一人暮らし。須磨区で被災。震災の2年前に脳梗塞で倒れた。板宿で被災しパジャマのまま素足で家を出たがその後火がつき全焼。「済んだことは仕方がない」と前向きだが、「時には玄関を開けたくない時もある」とのお話を伺う。(西谷、相馬)

・70代男性、一人暮らし。20年来の糖尿病で最近は膀胱炎で医者に通っている。毎日水泳に行っているがこのところ行っていない。少しストレスが溜まっている様子。「いろいろなことに、決まについて行くのが疲れる」とのお話を伺う。(宇佐見、鍋田)

・70代女性、一人暮らし。一人では寂みしゅうて寂みしゅうて、ボランティアと話したいと。伺すると近所の一人暮らしの男性を電話で呼んで同席。足が不自由で抹消神経が悪い。病院の看護とヘルパーさんの対応などを語る。ボランティアはいろんな人との出会いがあつて素晴らしいと。初めてあつた人とすぐに親しくなれるのは素晴らしいこと、とのご感想。励まされたり語りあつたり。(井手上、南野、東條)

5月12日

・この棟には高齢者が多く、かなり痴呆のある方もおられ、ところ構わずゴミを捨てたりしています。そのような方のところにボランティアが多く訪問してほしいです。腰を悪くしてリハビリ中、腰さえよければ自分もボランティアに参加したいという60代のお母さんからお話を伺う。(赤西、木村)

・70代女性。兵庫区の海岸通で被災して須磨区の仮設住宅に移されました。復興住宅は兵庫に帰りたいと申しこんだが当たらず、結局この名谷に残ることになりました。週2回のディサービスがあるが結構楽しいですね。ここは近所付き合いも少なく、特に男性の一人暮らしの方はどうしても閉じこもり気味になっています。一昨年ぐらいまではボランティアなどの訪問もあったのですが、とのお話を伺う。(赤西、木村)

・50代男性、一人暮らし。「自分がドアを開けて話しをするのも珍しいですよ」と言いながら戸口で快く短時間のお話を伺いました。趣味もなく、意地だけは強かったが年をとるとそれもなくなくなっていく。短気な性格で人を傷つけてもいけないので家で寝ている、と言いながら20年ぐらい前に仕事で高いところから落ちて以来の、からだの不自由やご家族のことをお話しいただいた。食事もコーヒーやパンで済ますこともあり、食べないことも多い。病院の先生が外出を勧めるが「元気に歩いている人を見ると腹が立ち、外出はしない」と。1日中イヤホンをつけてテレビを見ているのでドアホンも聞かないが、今日はたまたまジュースをとりに立ったの

でドアを開けたと、笑顔を交えたお話を伺った。(白岩、柴原)

・81才女性、一人暮らし。の近くの日赤病院が入院できない診療所になってしまう不安を訴える。緑内障で人の顔の見分けがつかないが声で聞き分け、極力ご自分で何もかもやりたいとの強い信念で生活しておられる様子を聞く。(籠嶋、川崎)

・70代のご夫妻。須磨寺近くの民家で被災。家屋全壊であったが1週間後には運良く西区の県住に入居できたが、そこではよそ者が来た感じで全く相手にしてもらえなかった。ここは住人どうし付き合いがよく、留守にする時も声を掛け合って外出している。よいところに入居できたと、直後の県住の様子を振り返り、駅にも近いこの生活環境を満足しておられた。(籠嶋、川崎)

・60代、70代のご夫妻。奥様からお話を伺う。長田区で被災、全壊。1階にいたご主人は家の下敷きになり、助け出されたのち大腿骨骨折で1週間の入院。2階にいた奥様は首下がひっかかってしまい抜けられず、近所の人に引っ張り出してもらった。ご夫妻はその後西区の奥の仮設住宅に移ったが、仮設の生活は雨に濡れて畳や床がビチョビチョとなり、風が吹くと揺れてその都度地震ではないかと、たいへんだった。山梨県のお寺のボランティアに気にかけていただき、地震の時に助けていただいた方と6ヶ月ぶりに再会、との感激体験も。現在、ご夫妻ともに病院通いだが元気。しかし、年金生活者が介護保険費用を自動的に引き落とされるのは本当に痛い。これだけは訴えてほしいと切々と話されました。また、介護してもらう時にさらにお金がかかるという現状を何とかしてほしい。神戸空港は要らないというご意見もいただきました。神戸市からの訪問はこの3月で打ちきりになり、そういう活動がどんどん減る中で、ぜひこの訪問は続けてくださいと言われ、あの1.17は一生忘れられない、と締めくくっていただきました。(西谷、西村)

・訪れたところ、お葬式の準備中とのことでお話しは何なかった。そういえば下の集会所をにわかに立ち退かされたのは、このお部屋の弔事が発生したためなのかと、急変する復興住宅の状況に直に触れた思いがした。(西村、井手上)

5月26日

・70代のご夫妻からお話を伺う。2人暮らしなので日頃は寂しくないが、年金が少ないために普段の生活がたいへんである。お金があれば少し遠くへ旅行をしたいのだが、今は駅の周辺にしか行かない。子どもが時々来てくれるので精神的にはよいが、経済的のもっとなんとかならないのかと思う。電話もかけるとお金がかかるので自分からはかけられない。地震の時に、ともかく財産類はなんにも持って逃げるができなかった。公的な支援はもうないのだろうか。(小波本、鴨頭)

・80代と90代のご夫妻。お部屋で話しこむ。2人とも現在外科の医者に通っている。地震の時、全壊で下敷きになったがようやく助かった。6人の子どもの育て上げ、水害と空襲と震災を経験した、たいへんな人生であった。今は多くの孫やひ孫達に囲まれて恵まれていると思う。「自分の家が全壊し、さらに全焼して行くのを見るのは人生で一番つらいことであった」と語りながら、地震の時に近所の方に助けてもらったことが多い、とのお話を伺った。(小波本、鴨頭)

・50代と60代のご夫妻からお話を伺う。突然の揺れに驚くと共に、とっさに自分達の安全確保に精一杯の状態であった。全壊した家からやっと這い出して、隣近所の埋まった方を助けて

歩いた。公園で寝泊りの生活が始まったが、近所の方々と協力し合って過ごした。仮設住宅時代は楽しかった。60棟の仲間達と協力し合いながら、ボランティアのようなことをしながら積極的な活動をして過ごした。今は家族の病気もあり実際には出てゆくことができない。ボランティアさん、必ずまた来てくださいねと言われた。感謝しているとのことである。ビールを勧められたが、断るのに苦労した。一杯ぐらいいいのはと何度も言われたが、断るのがつらかった。(小波本、鴨頭)

・家は全壊。仮設住宅は不便でたいへんだった。今も働きたいと思っているが、年齢が年齢だけに雇ってもらえない。外に出たいが身体が不安でなかなかできない。ボランティア活動に興味がある。平屋に居たのでマンション暮らしは戸惑う人が多い。友人が多いので以前の住まいの近くに戻ることが多い。命の大切さや近所付き合いの大切さを知った。地震の時の「助けて」の声が今でも耳から離れない、と様々なお話を伺う。(籠嶋、宮川)

・ここへ来てから接着剤によるアレルギーで、夕方になると急に気分が悪くなる。高層住宅に移ってきてからからだの調子が悪くなる人で、建物のせいである人も多いのではないだろうか。5月に仮設住宅の同窓会をやったが楽しかった。自分達の仮設住宅は、10人の方が亡くなったが、公営住宅に移ってから亡くなった方が10人になったと聞いている。この階でも昨年2人の方が亡くなった。助け合い励まし合う人の半分は仮設住宅の時代の人だ。あとの半分は昔住んでいた地元の人だ。仮設時代の人間関係は大きい。ただし、程よく離れて住んでいればこそかもしれないが、と言って笑われた。元の土地に戻って家を建てようとしたが、消防車が通るような道の広さを優先的にとったため、住む場所が狭くなり、その上近所で土地を売りたいがっている方が多かったので、売却に応じた。終の住処のつもりであつたが今はもう未練はない、と言いながら、戸口を開け放った玄関に座り込みながら、様々なお話を伺った。(南野、東條)

・地震で下敷きになったが布団をかぶって逃れた。仏壇が崩れて埋まった。12月に新築した家が1ヶ月で崩れてしまった。仮設住宅は高砂に3年半も居た。本当は元の長田に戻りたかったが、ここでよかったと思っている。「かみひこうき」を出します、と言われた70台奥さんからお話を伺う。(南野、東條)

6月9日

・70代男性。仮設住宅の頃から学生達とは交流があると言われる方からお話を伺うのは、今度初めて被災地を訪れた高校生達。仮設時代とは違って補助が出ないが、お食事会やカラオケ大会を老人会でやっているとのことのお世話役の苦労を聞く。ボランティアをやることは絶対に将来プラスになるとのこと。そしてそのことは学校では教えてもらえないことなのだ、とのことのお話し。最後は写真を撮ってもらい後日郵送を約し別れた。(矢野、平岩、佐竹、杉浦、藤井)

・60代女性、一人暮らし。初めは何もないと言っていたが、次第にいろいろな話をされた。息子が長田にいるが仮設の頃からずっと一人暮らしで、運動になるため常に外に出歩いています。例え今は健康でも家にこもりっきりになれば病気になってしまう。出来るだけ人のお手伝いをするようにしている。マンションの掃除などは率先して。などなど。(矢野、米村)

・インターホンで「週末ボランティアです」というと、「そなんん知らんで!」と答える方。インターホンで「お話し何に来ました」というと、「もう、いいですよ」と言う方。「いい」とは要らないのか? しばし悩んだが、やっぱりそうみたい。「ああ、あれね」のあと「なんもないわ」や、「元気にしてるし、何も言うことない」の続出。遠くからきた高校生達には

気の毒だったが、「なんもない」はよいことでもある。(木原、松本、伴、梅田、細井)

・市営住宅内では犬猫を飼ってはいけないことになっている筈です。たいへん迷惑しますので注意してください。(本人記入)

・60代男性。須磨区で被災、垂水の仮設住宅に。腰を悪くして3度ほど入院した。今も遠い病院へ通院中。しかし生活の不便よりも、仕事がないことがつらい、との言葉を重く伺う。

・89才女性、一人暮らし。両の足が不自由で時落ちこんで心細くなり不安であるが、元気に生活とのお話を伺う。とても上品で笑顔のすてきな方。話題も合って、楽しそうな時間を過ごされました。(木原、南野、井手上)

・60代後半男性。ここは年配の方が多いので、あと5年もしたらすっかり人が入れ替わってしまうだろう。いろいろ訪ねてくるけれど、一人一人に合った訪問や支援を考えてくれないと、と数々の役職をこなした方からお話を伺う。聞けば震災時に大怪我をし、腕や背中を人口骨で支える重度身障。そのときに奥様を失っておられると聞き絶句。声の大きな方で初めは怒っておられるのかと思ったほど。最後には「あんたらもがんばって」と言ってくださった。(木原、南野、井手上)

・85才男性、一人暮らし。空家募集で入ったが、入居者は若年層が多く高齢者向きとは言えない。3階に1階分しかエレベーターが止まらないので必ず階段を歩くが、階段は下りる時が特に困難。階段には手すりがついていないという念の入れ様。コンクリート壁にそっての階段は、若くてもたいへん。まして85才。団地内のコミュニティーは全くなく、孤独である。震災後の仮設住宅の方がコミュニケーションがとれていて良かった、と話される。外出も苦手で、家の中で雑用をしているのも悪くない、とこれから一人暮らしを覚悟されているお話を伺う。(阿随、籠島、仲島、加藤)

6月23日

・80代男性。中央区で被災。店の準備で午前3時半頃起床しました。一応食事の完了でカウンターで休憩していたところ空が赤くなり、今日は晴天かと思った矢先、突然すごい風と音が同時に鳴ったと思った瞬間、身体と椅子が傾き倒れると同時に店中のものが倒れた。2階に寝ていた子どもと娘が泣き叫んでいたが、階段に置いてあったものが全部足場に散乱。扉も傾き開けることもできず、無理して開けようとするとメキメキと気味悪い音を立て、夢中でやっとの事で2人を逃がす廊下に出たが外に出ようとしてまた戸が開かず、入口のシャッターが捻れどうすることもできなかった。窓ガラスを壊してやっとの思いで外に出ることができた。外では水道管が破裂して噴水状態で水溜りの状態であった。空も明けているがマンションのあたりはまるでどうもなかった。次男の家に3ヶ月間世話になる。その後、茨城県の姉のところに行き約1ヶ月間入院した。持病の心臓で入退院を繰り返した。(本人記入)

・70代男性。灘区の木造文化アパートに住んでいたが、就寝中突然大きな地震でアパートが全壊。その時はとっさに布団をかぶり、倒れてくる壁や家屋の木材を防いでおりました。暫時大きな余震がありましたが収まったので起きてみると見るも無残な状態でした。他の部屋の人達は近くの小学校に避難されました。私は無事であった友人宅にしばらくお世話になりました。仮設住宅ですが、当時市内では被災者が多く近くの仮設住宅は無理で、北区の神戸電鉄の道場南駅より西北徒歩20分、鹿ノ子台仮設に入居3年ほど過ごしました。振り返って当時、神戸市内の状態はあまりにも情けなく思えました。仮設住宅に入った時は本当に心からうれしく思

いました。現在の市住での生活は、誠に感謝の気持ちが一杯で、人それぞれの人生として1日でも永く元気でがんばりたいと思います。ボランティアの皆さん、有難う御座います。感謝！
(本人記入)

・70代女性、一人暮らし。兵庫区で被災。文化住宅の1階に住んでいた。生き埋めとなり、9時間近く埋まっていた。午後3時頃救出。被災住宅から何一つ取り出せなかった。思い出のアルバムが出せなかったのが今でもとても残念です。しかしこの地区は火災が発生しなかったので助かった。火が出ていたら救出も難しく、助からなかっただろう。この時の右肩の骨折などの負傷により、今もって通院をしている。週に1回、注射とりハビリの通院生活です。仮設住宅はポートアイランドに入れられた。この公営住宅に来てから、「愛の園」がよく来てくれていたが、今は訪問してくれない。役所の訪問者も来なくなった。今日来てくれた週末ボランティアも、初めは役所の訪問者かと思って警戒していたが、本当のボランティアと知って安心した。出れば来る時刻がはっきりした方がよい。午後4時以降はダメ。など1時間半のお話し伺いとなった。(杉尾、白岩)

7月14日

・50代女性、2人暮らし。週末ボランティアが来てくれると言うので懐かしさ一杯で待っていた。西神の仮設に住んでいた時に、親身になって話しを聞いてくれた方がいた。その方にもう一度会いたいと思っている。なかなか住宅が決まらない時に、とても心配してくれた。引越しをしたら連絡をする約束が、連絡先のメモをなくしてしまったのでどうしようもない。仮設住宅では一人だったが、ここへ来てからは介護が必要な人と同居しているので、なかなか出かけられない。ぜひ、その人を探して連絡をとってほしい。(木原)

・70代女性、一人暮らし。仮設住宅からこの復興住宅に来た時は、寂しかった。が、今は隣近所ともお話しができるようになった。今日はテレビの方も来られて家の中で話しができて少し恥ずかしい気持ちになったが、震災の時の話しを久しぶりに話すことができて良かったと思う。何時もは一人きりです。あと、お茶会に出るために隣近所の方4人と誘い合い、話が弾んで良かった。このように30人以上の住宅の方が一同に集まったことは久しぶりです。9日にはまたみんなで一緒にテレビを見る予定です。今日のお茶会も、事前に各部屋へ週末ボランティアさんの呼びかけがあり良かったと思う。(福原、溝畑、小波本)

7月28日

[復興住宅の集会室にて茶話会を開催しました]

300回のご報告(掲示板内容より、東條)

週末ボランティアの被災者宅訪問も300回を数え、ちょうどその300回に当たる日の7月28日の訪問は、訪問先の集会所で「茶話会」を行なう形で、戸別宅ではなく多人数によるお話し伺いを行なうことになりました。

この日は新人5名を含めて25名の参加があったほか、毎日新聞とサンテレビ、遅れて神戸新聞の取材があり、雰囲気的にも盛りあがりました。

サンテレビは何軒かを訪問撮影をし、その他は全員で手分けをして茶話会へのお誘いを戸別にまわりました。その結果、住民の方の参加者は45名にのぼり、集会室は文字どおり満員、ボランティアは床や壁面にすわったり立ったりの状態ですサービスに努めていました。ギターのう

たと語りで被災地の6年半を振り返り、「故郷」を歌ってみんなで楽しみ、ボランティアの一人一人の自己紹介と、ついで住民の皆さんからの発言や自己紹介ののち、個別の懇談の時間を持ちました。

サンテレビの林アナウンサーからも発言があり、この方知ってる人！ にほとんどの方が「ハイ！」と挙手、国会で断食で有名な東(あずま)さんが週ボラのことを皆さんにご紹介くださったり、沢山の意見や自己紹介はいつ果てるともない茶話会に発展しました。

重要だったのはその中で、みんなに手を上げてもらった即席アンケートでした。皆さんの発言の中で、仮設住宅と公営住宅との比較について少し食い違いが見られたため、「あくまでも茶話会の座興として」「仮設の頃がよかったか、今の公営住宅がよいか」という挙手アンケートを行ないました。

その結果は、いろいろな面を入れて全体としては「仮設がよい、7名」にたいし「公営がよい、22名」であるにもかかわらず、人間関係についてだけ考えるとでは結果が逆転し「仮設がよい、20名」「公営がよい、6名」となったのです。

終了時間を過ぎてもボランティアを含めた話しの輪は一向に解散せず、2時間を越す「茶話会」は、こんな場の要求もあつたのだとの新しい週ボラ活動への認識を残して、大成功のうちに終わりました。

6年半、300回の足跡は、文字どおり無数のボランティア精神の膨大な累積であります。そのことを肝に銘じて300回の節目を無事に通過したことを多くの皆さんと共に喜びたいと思います。

8月11日

・87才男性、一人暮らし。奥さんは10年以上前に亡くなられ、4人のお子さんが神戸周辺にお住まい。地震で家が全壊、息子さんの家と仮設住宅で3年半、ここに移られて3年になる。ここに来てから雪の日にこけて脳の手術、昨年足を痛めて今は月に6回の病院通い。買物・料理は週2回のヘルパーさんに頼み、週2回のデイサービスに行かれる。デイサービスには一人住まいの方が多く、催しも多くて良いですよ、とのこと。特に不便なこともなく、とのお話を伺う。

(前川、山本、川口)

・87、82才のご夫妻。お2人とも身体がもう悪くなってきて、奥さんは買物して重たい荷物を持つのがたいへんだ、と言われる。お2人のうちどちらが先に亡くなるか判らなくて、その後残されて一人でやっていけるか、という不安を語られる。仲良くないよ、と言われるお2人にこの上ない仲のよを感じて、上がりこんでお話を伺った。(前川、山本、川口)

・90才男性、一人暮らし。ここの公営住宅は198世帯のうち単身・高齢者が59世帯と伺う。須磨区で被災し子どもと二人怪我はなし。避難所に103日、寒い廊下から図書館へなど教室を移動しながら過ごす。約100軒からなる仮設住宅で3年4ヶ月。ここへ来てから心筋梗塞でお子さん一人を亡くした。国鉄から中小企業へ、年金暮らし。家賃35000円の生活。25年前に奥さんを亡くされ「寂しいのはもう慣れた」と、様々お話を伺う。(籠島、小林、富田)

・70代女性、一人暮らし。買物など不便だが、空気がよくて良い。近くに小さなスーパーでもあればよい。みんな仲良しで、楽しい。ここへ来てご主人が亡くなって2年になると言う。「ぼちぼち健康」と言われるお母さんから、楽しいお話を伺う。(籠島、小林、富田)

・51才男性、一人暮らし。親と一緒に入居したが亡くなった。老人のボケを経験したがすさまじ

かった。これからもみんなたいへんだと思う。震災後1年ぐらいは働く気もしなかった。何もない、何もできない状態だった。1階でつぶれて外へ出てみるとみんな同じだった。みんななくなっていた。学校へ逃げたが火は途中で止まった。仮設住宅は長屋的で楽しかった。隣のばあちゃんの面倒を見たり。自分は働いているのでここでは隣近所付き合いはないが、結構面倒見る人は多い。最近の不景気リストラで自殺した友人もいる。しかしここも住めば都で、震災6年半の決算は、震災の時の借金の残りだ。と、今日家にいることが珍しいという男性から快くお話を伺う。(山本、佐沢、東條)

8月25日

・65才、67才ご夫妻。長田区で被災。家全壊で頭を割り血まみれで病院へ行った。そこでどれだけの死人を見たことか。ハイ次！という具合で息のある者を優先で医者が診ていた。死体は何百と見た。結局何も治療をしないままに戻ったが、来る時は1軒が燃えていたのを見たが帰りには道路が煙でいっぱいになり、火が広がっていた。火災の原因はその後押さえられており不明となっている。また、野中広努が「泥棒は一人もいなかった」といったがとんでもない。自警団が34人も捕まえたが警察はやりすぎと言った。ボランティアの女の子も襲われた。最大1600人を収容した避難所の世話役をやっていたが、この避難所の小学校では教育委員会の指示で、居てもらったら困るとの対応で、救援物資を断ると言う問題もあった。奥さんは避難所で肺炎になり医者も薬もなく、街の病院へ行ったら即入院となった。9月に退院し仮設住宅に入った。国会にも行き議員を捕まえてもつと国に言え、と迫ったが「あかんねん。他の県も同じやねん」とのことだった。公営住宅に入ったがここも仮と思っている。「元に戻りたかったがここにしかなかった。仕方なしに入った。チャンスがあれば元の街に戻りたい」との奥さんの言葉。買物にも震災前に住んでいたところについで戻ってしまう。ここの住宅の進入道路は、両側に巨大なコンクリートブロックを敷き詰めてあり、入口には「この奥、Uターン出来ません」との看板があった。業者や介護の車がコーナーなどにギリギリに停車しており、異様な風景だったが、初期に駐車トラブルがあったので道路に止まれない様にコンクリートブロックを置いたと言う。謎が解けた。写真を撮り、茶菓子をいただいてお話を伺う。(大槻、丹波、東條)

・66才、64才、31才の3人暮らし。長田区で被災。借家が全壊。西区の仮設に3年居てここに移ったが、交通不便、買物場所がなし、騒音・ほこりがひどく、生活し難い。近隣とのコミュニケーションはなく、月1回の掃除やゴミ出しなどで会うくらい。長田に居た時は外へ出て賑やかだった。今は両親はあまり外に出なくなった。通勤がたいへんでこの子がかわいそう、とは両親の言葉。6年半の感想は「ええことなかった」「元へ戻りたい」でした。戸口で奥さんとお嬢さんのお話を聞く。(大槻、丹波、東條)

・71才男性。奥さんと2人暮らし。住んでいたアパートは全壊。ここは周囲に買物をする場所がない。コミュニケーション不足で孤独感がある。生きるのが疲れる。震災で学んだことは、人類皆仲良くすべきであり、人と人との付き合いが大事だということ。とお話を伺う。(佐藤、小南)

9月8日

・59才男性。ここは住宅の設備はとてもよいが、脊髄を痛め胃を手術している身では近くにコンビニしかなく買物に遠方まで行かねばならない不便はとてもこたえる。また、公衆電話がな

いのはとても不便でな緊急時の用も足りない。郵便ポストがなく、バス停か駅まで行かねばならないのは実に不便。ボランティアは何もできず、行政は生活弱者を見ていない。障害を持った弱者へのサービスが3日に一度の食事や週に一度の風呂なのはおかしいではないか。80才の天涯孤独の老人が、3ヶ月で病院を替わらねばならず、その先が見つからないので悪くもないのに身体に管を通したりしている。震災の復旧工事には地元の業者はいない。あるいはいても遠くの業者の下請けでしかなかった。地下鉄海岸線工事では低コストを進めたために事故が多発。ここの業者が全て神戸空港の工事にまわされる。震災で疎開した姫路から神戸に戻ってきても、役所からは何の連絡もなかったが、姫路の方から連絡のあったことが嬉しかったくらいである。震災の義捐金を10~20万円くらいもらったが、自立支援金で100万もらえるところを今までの分を差し引かれて60万円しかもらなかった。なぜ義捐金の分まで引かれるのか？ 神戸の緑化も役所の息のかかった業者ばかりである。行政に対してはもう諦めている。本当に人を助けるには少しのお金をとった方が頼る方も頼りやすいのではないか。仕事の斡旋や買物の代行などを手数料をとって行なってはどうか。訪問範囲を絞るには役所から障害者リストを手に入れた方がよい。こういう活動に輪をかけてほしい。その為には無償ではあかん。震災による引越し続きで借金が増えている。金がなくなったら誰も来なくなった、と2時間を越える本音のお話を伺った。(平田、永田)

・仮設住宅時代は楽しい日々を暮らしていた。行事、炊出し、配給、バス旅行など。公営住宅へ入居してからは震災仲間の意識もなくなり、人間関係もうまく行かずギクシャクしています。訪問する方も仮設時代と勝手が違うと思いますが、公園や集会所で行事などもして、顔なじみになるといいのですが。(本人記入)

・わずかなお金以外は持ち出せず、全焼したが火災保険は下りず。ご夫妻ともからだの不自由で「焼けてしまっただけで済んでよかった」と考えなければ前に進めない、と。この住宅の買物の不便が年々不安の元となってくると、年をとってくる不安を訴える。この近所は全体に付き合いはよいが、やはりインターホンを押すのは気がひける、と約1時間お話を伺う。(川上、矢野)

・50代女性。震災前は元気だったが被災後体調を崩し、難病にかかり病院通い。子どもが1年間ほど勉強をしていないのに普通の中学校に入学してついていけず、登校拒否に。自治会のノリにはついていけず、少し距離を置いてほしいと感じる。助けて、という人のうめき声がいまだに耳について離れない。外の山麓バイパス道路で事故が多発しており、救急車が来る度にその音に反応して外に出てしまう。寝ている時突然パツと飛び起きる。これは親子で黙認している。など震災の後遺症についての深刻なお話しも伺う。難病のお話しにも訪問者は唖然とする。2時間に及ぶお話し伺い。(若原、原、森)

・50代ご夫妻。仮設にいた時から体調不良が続く。仮設の頃は区役所の人がよく来てくれたが、今は来ないし来ても「〇〇してください」とは言えないだろう。「仕事ないしね、厳しい時代ですよ」、面接をやっても募集一人に対して100名来ると言う。この春には13日ほど働いたが今は月に2~3日働いたらよいくらい。今は貯えだけでやりくりしている。たとえ、区役所の人が訪問してくれても「仕事がない」なんて言えないしね、と戸口での立話を伺う。(原田、坂本、長船)

・50代男性。靴職人をやっているが、なかなか仕事が入ってこない。つなぎの状態でも金銭的にも困っている。「神戸の市も力を入れていないので、長田のゴム関係はもう衰退していくやろ

ね」と語る。やはり仕事が減り出したのは震災のあとから。中国などに仕事をまわし、単価が安い。「もう50もまわり他の仕事はでけへん。」と（原田、坂本、長船）

・40代後半女性。役所は月に1回くらい来るらしい。ここは人間関係の悩みが多いらしい。200戸の中で会合などで人が集まると、必ずいさかいが起こりなじめない。入っていきにくい雰囲気である。職場も来てくれないかと言っているがなじめないので行ってない。「こんな悩みは誰にでもあるよ」と言いながら、ボランティアの訪問に、吐き出すように日頃思っていることを語られる。ご主人が出張中に震災に巻き込まれ、行方不明だったためにこちらに探しに来た。環境とのギャップに悩むお話を伺う。（若原、原、森）

9月22日

・50代男性。車椅子の奥さんを介助して出かけるところ。慌ただしそうだったのでご挨拶のみ。ところが終わりかけに廊下でバツタリ。昨日退院したばかりの妻が今日から通院の由。今度は食料の買い出しだが、家においておけないのでと奥さんも一緒に出るとのこと。「本当に不便で不便で」と何度も言われる。「あまりにも不便」とのお言葉。バスの停留所は建物の周りをグルッと一回りせねばならず、遠くてしかも通路が狭く段差が多くきつい坂を上らねばならない。ノンステップバスが目前の高速道路を通るのがやるせない。バスも普通のバスなので毎回乗務員さんと呼んで車ごとバスに持ち上げてもらわねばならず迷惑がかかり、なかなかできない。ここは障害者の方も多いが、タクシーを呼んで行ったりする方が多いとのこと。西神にある障害者用の住宅に入りたかったが、そこがとても難しく、結局仕方なくここに入ったとのこと。「もう一発でスパンと入った」と苦笑をされる。「文句言っても仕方がない。市のことはなかなか聞き入れてくれない。まあ、あんたらもがんばってください」。（矢野、長船、坂本）

・40代前半男性。西神の仮設にいたが、ヤクザとケンカになり出た。現在長田の病院へ精神系で通っている。外食中心の食事で、ぎっくり腰とアトピーと目を患う。チラシで待っており、2時間の訪問終了後他のメンバーに「今日はもう来てくれないのか」と問いかけがあった。（近藤、松田）

・80才女性、一人暮らし。脳梗塞で3回も倒れたため体が不自由で糖尿もある。1日に3回、ポストまで歩くだけ。話しをする相手が少ない。挨拶も少ない。バスは段差があるために乗れない。いつもタクシーを利用する。費用がたいへん。ヘルパーさんが週に3回来てくれるが、買物をしてもらうなど時間制で延長料金などたいへん。近所にはお店が何もなくコンビニが1軒あるだけ。不便。1ヶ月に2回、医者に自宅に来てもらう。1週間に1回、お風呂に入れてもらう。薬局からも薬を持ってきてもらう。いずれも費用がかかって困っている。（吉田、本岡）

10月13日、10月27日

・70代後半女性、一人暮らし。足が悪くベットの上からあまり動けない。年金暮らしで不自由はないが外に出られないのが寂しい。犬のペットが最大の心のやすらぎでもあり、心配の種でもある。長生きしてろくなことはない、と繰り返される。テレビもよく見られ、テロ問題での戦争で若い人達がかわいそうだ、などの話しが弾んだ。（籠嶋、日西、坂本）

・70代前半女性、一人暮らし。仮設住宅の頃の週ボラ訪問をよく覚えてくれていた。部屋に上がりこんでくれた人は特によく覚えている。仮設ではいろんなことがあった。これまで知らなか

ったことがよく判った。週ボラのみんなと再会できてよかった。この住宅には知り合いが誰もいない。仮設と違って閉じこもっていて何も判らない。月1回の掃除とか食事会などあるが、身体が弱くなり、付き合いなくなっている。もう引越しもこりごり。体力さえあれば友達とも行き来して会えるのに。本数の少ないバスに乗らなければ何処にも行けない。抽選にはずれ続けて幹旋でやっとここへ入れた。震災では全壊で全焼、はだしで外へ飛び出したままだ。荷物も出せなかった。今つらいのは、おしゃれができないこと。震災前に買物をした一生着ても困らないぐらいの着物が…全部なくなった。四季の服、気に入った服がない。それが一番つらい。「こんな目にあうとは夢にも思わなかった、お金で買えないものを失った」「人を大切にすることが結局自分に返ってくる」と言われる。テロの事件を一人で見ている「人を殺すぐらいならオマエが死ぬ!」と思わず叫んでしまった。この話を人にしてスツとした、など長時間のお話を伺う。(鹿島、長船)

・30代女性。かつては市からの巡回訪問があったが、最近はない。訪問日は事前にエレベーターのところに貼り出されていたが。かつて消火器、浄水器などのセールスが多かったが今は来ない。ここの住宅は入退居が激しい。(赤西、田中)

・70代男性。ここは生活関連のものが揃っていないので買物が不便。被災者をただ仮設から放りこんだだけという感じ。震災後の市が買い上げた土地を利用して、被災者住宅を建てることのできなかったのだろうか? 公共事業のムダが多いのは何とかならないか、など戸口で約15分、お話を伺う。

・70代女性、一人暮らし。長田区で被災。火事には遭っていないが借家が全壊。親戚の家に長くいたが、気を使うのでここが建ってすぐ入った。今は足が悪く、つえをついて歩き回るのも恥ずかしく、あまり外出しない。愛の園の人が週に1回来ていたが来なくなった。市の人が、もうまわらなくて良いと言ったので来なくなった。同じような境遇のもの同士が集まって、階段の下のところではしゃべっている。お部屋で約45分のお話を伺う。(田中、赤西)

・50代男性。地震の時新聞配達中だった。ビルから出てきたら戦争のような街の状況だった。交通事故にあって意識不明のまま1年入院。仕事ができず。あまり人と話しをするのが好きではなく団地の人と付き合いはない。テレビが唯一の楽しみ。今は仕事があるのか、できるのか唯一の心配。(週ボラが来ると言うので2時間も待っておられた)。(坂本、鹿島)

・高齢女性。インターホンで3分ぐらい経って出てこられた。30分の話しこみ。耳が遠い、足が悪い。店がなく不便、家から出られず医者に行けない。何度も転倒した。バス停留所まで歩くのに20分かける。避難所は楽しかったけれど、今は寂しい。設備もよくて空気もいいんだが…。ご親切にね。(矢野、坂本)

・60代女性、一人暮らし。夫は地震で着の身着のまま下敷きになり、ショックで病気にかかり亡くなった。地震のあとはしばらくずっと泣き続けた。キリストさんのお世話になった。地震は今でもぞっとする。新幹線の騒音が、トンネルに入っている時がたがたと揺れて怖い。慣れなくても怖い。介護保険が高くてかなわん。デイサービスは950円。コンビには若いものの向けて週に一度ぐらいしか行かない。友達と外で話しをします。そうしていないと気がおかしくなる。上がりこみお話し。(矢野、藤原)

・60代女性、一人暮らし。3年半住んでいるけれど顔知らない人もざらに入れる。朝早く出るし5時頃ご飯食べに帰るだけ。ここのことは全然判りません。ここはまあ寝るだけ。住んでるだけ。2、3軒と顔合わすだけ。来る人もなければ声をかける人もいません。つらいやら情けないや

ら寂しいやら、顔見せる人もないし地獄よ、と朗らかに言われる。(坂本、矢野)

・70代女性、一人暮らし。訪問時身体の具合悪く寝ていたが、気持ち良く対応していただきお茶までいただいた。震災時アパートは全壊したが怪我はなかったが、その後の水汲みで腕を痛めた。それまで病院に勤めていたが身体がついていけず辞めた。再度仕事がしたくなったが年齢などもあり断念。生活に張りがなくなった。ここは不便過ぎる。気の合った友達もできて楽しく生活しているが、と。(籠嶋、鹿島)

11月10日

(メモ作成せず)

11月24日

・「戸を締めたら終わりやからギクシャクしなくていい」と仮設住宅時代の人間関係のたいへんさを言います。「週末ボランティアはよう人の世話をやいてくれる。それでもなかなかできることやない。間でポーンと放ってしまう人が多い中で、ようやってくれたと思います」と。ここに来て初めて茶話会など行事に参加したのは、週末ボランティアがやっているから、とのこと。心臓の大手術から生還して帰ったばかりで家にいるけど、困ったことと言えば「お金が欲しいくらい」「今の生活はリハビリみたいなもんやで」と笑っておられた。「ここは空気もよいし車のある人にはいいけれど、足腰弱い私らには出かけるんはチョットしんどいな。バス停まで遠いで困る。この市住の前にバス停が欲しい」。「死んどってみたい、あんたらと話してきへんかった」と懐かしい仮設時代の知り合いの方。(佐沢、長船)

・「健康状態が悪いので心配です。あまり人様にご迷惑をかけたくありませんので一日でも早くここから引っ越したいのですが、暮らしがあまりり良くないので辛抱しております。一日笑って過ごすことはありません」との支援シートの書きこみを見て訪問する。上がりこんで談笑するうちに「お話をさせていただいて病気はなくなりました」とお元気になられました。2年前に親しい人に亡くなられて落ちこまれていた由。お互いにA型ですから気を使いますねと楽しく退室。よい訪問でした。(籠嶋、篠原)

・60代男性、一人暮らし。元専門の職人で、テーブルやら小道具の手作り品など文字どおりプロ級の作品が家中に。植木、鉢物も手入れよくなされており、沢山作られていた干し柿をお土産にいただく。おいしいお茶を入れていただき1時間10分のお話し伺を楽しみました。(白岩、矢野、坂本)

・60代後半のご夫妻。茶話会も寄ってきてほしい人は来ない。ここはきれいだし広いしよいけれど、帰って誰もいないのでは寂しいだろう。用もないのにインターホンを鳴らす気にもなれず、下町の「窓越しで話す感覚がない」。老人会がないから旅行とかもない。1年前までは年に数回ボランティアが来て一生懸命やっていたが、今は何もない。震災の前年に骨折し、直したばかりで全焼した家から身体だけで逃げた。ここはタクシーも乗れないしバスは不便。段々出かけん方がまし、となってくる。若い人があまりり関わってくれない。年寄りだけで何とかなしている状態、と話しこむ。(佐藤、長船)

12月8日、12月22日

・79才男性。奥さんとケンカがストレス解消や、と言いつつ日溜まりの屋外でお話を伺う。健康第一、元気で病院なしだ。人生は運と努力が半分づつ。困ったことは特にないが、とにかくお金がなかったらみじめ。お金がなかったら生活できない。タリバンの仏像破壊にしても、感謝の心がなくてはダメだと思わせる事件だ。(篠原、佐藤)

・65才女性。家は全壊。いまだに身体が震える感じ。揺れに敏感になってしまう。米のとぎ汁などを使ってトイレ用の水にするなど昔の知恵が役に立った。今でもお風呂の水は絶対に抜かない。でも戦争よりはましだ……。住宅に何度申しこんでも当たらず。役所の人間に怒り飛ばされた。ここは交通の便が悪い。接続が全然不便。地下鉄へのつながりが不便。被災者には「してもらって当然」という考えがある、とちよっぴり批判も。(矢野、中山、氏原、小川)

・50代女性。ロビーでお話を伺う。バスの不便、交通の不便を訴える。国会に腹を立て「小泉政権はあかん!」「被災者の心を聞けへん!」といきどおる。自分も身体は悪いけど、限度まで弱者は支えたいと思う。結果は必ず返ってくる、と語る。(森、田中、菰田、華山)

・70代女性。夏は手が動いていたが冬になると…。チョットでも歩かないと血糖が下がらないし。住宅がよい人ばかりで助けてくれます。ボランティアがよく来てくれるので嬉しいと。嫁が迎えに来たがやっぱり神戸で生まれたから神戸にいたいと断ったとのこと。悲しそうな顔をして、お互いに悪いことを言い合っている、と言われる。今8300円の家賃が1年後から上がって行くのが心配。道路の向こうのバス停まで渡ることができない、と言われる。ここに入ったら死ぬ方がまし、孤独死が多い。誰にでも会ったらおはようと言う。自分が真っ直ぐ見れば相手も真っ直ぐ見る。人を嫌ってはダメ、と。(田中、長船)

・50代女性、80代の母と2人暮らし。現在バイトをしているがなかなか仕事がない。就職は難しいです。母が心臓を患っていて外出がし難いので、周りの奥さん方と一緒に動けない。ここは交通の便はよいですが、高齢者にとっては住宅までの坂が辛い。近くに道路があるので騒音がすごい。夏には排気ガスやほこりが入ってきてしまう。(玉井、山田、仲島、猪上)

・75才ぐらいの男性。「もう震災についての話をしたくない、ほじくり返さないでくれ。思い出したくない、忘れたい。」の連発にこちらが泣きそうになってしまった。しかし最後に涙を流された時、震災のお話を直接聞いた訳ではないけれども、何か感じるものがあった。最初の訪問だったので強いショックを受けた。今まで震災で受けた「心の被害」というものを甘く考えていた。この震災が与えた影響は何年経っても薄れない(逆に強まっている)と思う。「もう来てほしくない」と言っていたけれど、これからも問うすを見に行った方がよいと思う。(今井、加藤、青山、田倉、白岩)

・80代父、50代娘、10代孫。飲食店を経営していたが、朝4時起床で店の準備を終わりカウンターで一休みしてお茶を飲んでいた。外を見ると南の方が真っ赤になっているので今日も晴天と思っていたと、すごい音がしたのでなんだろうと思った瞬間、地面が左右に揺れ始め、店内の食器棚階段にあったものが崩れ落ちてきて足の置く場もなくなった。2階で娘と孫が寝ていたのですがすぐ助けに行ったが、扉が変形してしまっていて開かないので壊して助け出した。震災前から孫が風邪のため40度の熱で窓際で寝ていたが、風が強いので反対側で寝ていたのですが、鉄筋の建物であるがセメントが厚いそれが倒れたが逆に寝ていたので助かった。外は道路の水道管が破裂して噴水で、周辺は大水で外に出たものの片隅で夜をあかした。電話不通、誰も連絡がとれなかった。自宅は長男に頼んでいたが家をやられたので行方不明。近くの震災に遭って

いない方達が訪ねてくれ食事を持ってきてくださった。午後3時ごろ垂水に居住の次男が来てくれたが交通も麻痺して来るのもやっとのことであった。次男のところで4ヶ月ほど世話になり、5月頃に仮設住宅に移った。平成10年7月に現在の住居に居住。落ちつきました。(本人記入)

・92才と96才のご夫妻。長田区で被災。病院に入院中の奥さんは知人からの電話で自宅が燃えているのを知った。急いで帰ってみたが自宅へは近づけなかった。ご主人は首の下まで埋まっていたが自力で脱出した。小学校へ逃げるにもすぐ近くなのに、あちこち燃えているので遠回りした。途中、屋根の上から夏布団を投げってくれた人がいた。はきものも途中で「これ、はい」ともらった。小学校にいとすぐ息子が来てくれて、避難所の苦労は知らずに子どもの家を転々として暮らした。それにも疲れて北落合の仮設住宅に入れてもらった。今は週3回ヘルパーさんが家の掃除と買物、炊事に来てくれる。ご主人は長いこと会社づとめして定年後も近くの工場で働いていたので、2人で食べる分ぐらいはなんとかできた。神戸水害、神戸空襲、大震災に遭い、その度にゼロから立ちあがって来たが、もう疲れた。早くお迎えが来てほしい、死にたい。知人だけでも28人、あの日に亡くなった、と言われていた。(堀内、岡部、熊田、柿崎)

・60代ご夫妻。長田区で被災。奥さんは2階で、ご主人が1階で被災。近所の人に掘り出してもらったが、ご主人は大腿骨骨折。手術中つきそった奥さんが疲れから発病し、左眼は視力がほとんどなくなった。今は、集会所で手芸をしたりして友人もできた。仮設ではボランティアの人達によくしてもらった。心配なのは、介護保険料が10月から満額とられていること。息子のところも子どもが小さいのに、お金がかかるのに介護保険料が40才からかかってくる。高校生ボランティアには「遠いところから来てくれてありがとう。がんばってね」とおっしゃってくださった。玄関内に私達を招き入れて立ち話だったのを、申し訳ながっておられた。(堀内、岡部、熊田、柿崎)

※訪問先はいずれも復興住宅です。

※末尾の名前はお話を伺ったボランティア、「本人記入」とあるものは住民の方自身で支援シートに記入されたものです。